

タイトル	<i>The Three Robbers</i>				
著者（文・絵）	Tomi Ungerer				
出版年	1961	出版社	Phaidon Press		
翻訳版	『すてきな三にんぐみ』今江祥智訳、偕成社、1969年				
総語数	350語	ページ数	48ページ	YLレベル	2.4
あらすじ					
<p>夜ごと旅人を襲って金銀を集めていた三人の泥棒が、ある日いつものように馬車を襲ったところ、そこには一人の女の子が。意地悪なおばさんのところに連れて行かれるところだったみなしごの女の子ティファニーちゃんは、泥棒たちに出会ってかえって喜ぶ始末。泥棒たちも、ティファニーちゃんを大切に隠れ家に連れて帰ります。翌朝、宝物の山を見たティファニーちゃんは泥棒たちに素朴な疑問を投げかけます。「これ、どうするの？」そんなことを考えたこともなかった泥棒たちは、当惑しますが、恵まれない孤児たちを集め、お城を買って、そこで暮らし始めます。子どもたちは次々に大きくなって結婚し、お城のそばに村を作りました。そして三人組のため、三つの高い塔を建てたのでした。</p>					
紹介					
<p>この作品では、泥棒という「反社会的な人間たち」がひよんなことから孤児たちを育てることになります。泥棒が主人公なんて、およそ正統派の絵本では考えられないことだったらしく、筆者トミー・ウンゲラー(1931-2019)のオフィシャルサイトには、子ども向けの絵本の表紙にまさかを描くことすら当時は物議をかもしたと記されています。ウンゲラーは鋭い社会風刺で知られており、反体制の気骨をもった作家でした。「絵本とはこうあるべき」という固定観念の境界線を常に広げようとしていたアーティストでもあったのです。</p> <p>そもそも泥棒は、物語ではとても魅力的な主人公であったりすることが多々あります。怪盗ルパンしかり、天空の城ラピュタのドーラー一家しかり、泥棒であっても人情味にあふれ、我々の心を魅了するキャラクターたちがたくさんいます。その意味では『すてきな三にんぐみ』という邦題は、そんな主人公たちの魅力をよく表していて、最高のタイトルだと思います。英語の原題 <i>The Three Robbers</i> よりもすぐれているといえるかもしれません。</p> <p>ただ、「この泥棒たちは実はいい人でした」や「悪人が改心して慈善家になってよかったですね」という解釈ではあまりにも皮相的です。もっと奥深い何かを読者に問いかけているように思います。そもそも本来、孤児を救済すべきは政府もしくはコミュニティーであって、泥棒がその役目をかわって引き受けている世の中にモノ申す、というメッセージとも読めるでしょう。</p> <p>また、物語の語り方で気づくのは、この絵本で具体的なセリフはティファニーちゃんの一語“<i>What is all this for?</i>”（これ、どうするの？）だけだということです。対照的なことに、三人組にはセリフもなく、名前もわかりません。他の登場人物はカラーで描かれているの</p>					

に、三人組は黒い衣装で、まるで黒子です。でも、三人組のトレードマークである帽子で彼らはシンボル化されています。お城の紋章は三つの帽子ですし、子どもたちが建てた塔は三人組の帽子そっくり。また、不思議なことに拾われた子どもたちはみんな赤いマントの服を着ています。黒と赤のコントラストがスタンダールの小説『赤と黒』を連想させますが、何か意味があるのか思わず考えてしまいます。

翻訳版の解説には、ウンゲラーがこの作品を自分の娘に捧げていると書かれていました。筆者がどんな意味を込めたのかは知りませんが、子どもの存在が人に生きる意味を与えるきっかけになることもあるでしょう。目的もなくただ生きてきた男たちが、小さな女の子との出会いによって生きる目的を見出したのではないのでしょうか。

子どもの頃にこの作品を読んだときには、黒と群青色の背景に唯一目立つオレンジ色のまさかりや強盗の道具で、なんとなくおどろおどろしい雰囲気だけを感じていたように記憶しています。しかし、大人の目で再度読み直してみると、この作品の深みに圧倒される思いです。

ウンゲラーは140の作品を残し、1998年には児童文学のノーベル賞といわれる国際アンデルセン賞（画家賞）を受賞しています。

指導ポイント・授業活用例・学生の声など

【注意すべき英語表現ほか】

「おどしのどうぐ」である blunderbuss (ラッパ銃)、pepper-blower (こしょう・ふきつけ機)、axe (おおまさかり) が出てきます。イラストでどんなものかわかるので、わざわざ和訳を教える必要はないかもしれませんが、和訳を知ってスッキリしたい学生のために日本語訳も用意しておくといよいでしょう。

また泥棒関係の単語にはやや難易度の高い表現もあるので、確認しておくといよいかもしれません。Fierce robbers (獰猛な強盗たち)、hide-out (隠れ家)、loot (略奪品) など。

【授業活用例】

ディスカッション

以下のようなテーマで話し合いをしてみましょう。

- この作品を描いた筆者はどのような人だと思いますか？
- この作品のメッセージは何だと思いますか？
- 泥棒が出てくる他の物語を考えて、この作品と比較してみましょう。物語において泥棒にはどんな魅力があるのでしょうか。
- 「ティファニーちゃん」だけ名前がありますが、そこからどんなことが考えられるのでしょうか。
- この作品は子どもにふさわしくないと考える人もいます。あなたはどのように思いますか？

関連作品・参考 URL

アニメ

1) <https://www.youtube.com/watch?v=dcbADAtjCN0&t=21s>

本作品は1972年にアニメ化されており（6分）、YouTubeなどで視聴することができます。原作に忠実に作られており、臨場感たっぷりです。

2) https://www.youtube.com/watch?v=fGGXW_vh_v8

2007年には *Trick or Treaters* というタイトルでハロウィンと掛け合わせて長編にしたアニメが制作されています。

その他の作品

なお、ウンゲラーは動物虐待に反対し、脚光を浴びない動物を主人公にした物語も多く手掛けていて、ヘビが主人公の *CriCTOR* (1958)、カンガルーの *Adelaide* (1959)、タコの *Emile* (1960)、コウモリの *Rufus: The Bat Who Loved Colors* (1961) などがあります。

上述の書籍情報は、以下、現在入手可能な版を載せます。

- *Adelaide* (Phaidon Press, 2011) (『アデレードそらとぶカンガルーのはなし』池内紀訳、ほるぷ出版、2010年)
- *CriCTOR* (HarperCollins, 1983) (『へびのクリクター』中野完二訳、文化出版局1974年)
- *Emile* (Phaidon Press, 2019) (『エミールくんがんばる』今江祥智訳、文化出版局1975年)
- *Rufus: The Bat Who Loved Colors* (Phaidon Press, 2015) (『こウモリのルーファス』萩谷琴子訳、岩崎書店、1994年および『コウモリのルーファスくん』今江祥智訳、BL出版、2011年)

(文責：小林めぐみ)